「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ㊶

小泉とし夫

■官吏挺身隊へ

昭和二十年七月になって間もないころ、昭夫は官吏挺身隊への出向を命ぜられました。官吏挺身隊とは、各省に勤務する日系の若手職員によって編成された勤労奉仕隊のことです。関東軍の大部隊が南方その他の戦場に動員されたので、その兵員を補充するため軍需工場からも工員たちが召集され労働力が激減していました。

労働力不足に拍車をかけたのは、日本の敗戦を予感した満系（漢系）労働者たちの逃亡でした。その穴埋めに派遣されることになったのです。

昨年は学徒動員、今年は官吏挺身隊とまったく動員から縁のきれない世代でした。

昭夫らの北満各省の官吏たちは、ハルビンにあまり遠くない孫家（ソンジャ）という村の飛行機工場に集合しました。

北安省から参集した官吏のなかに、山内、古舘両君の顔もあり昭夫に手をふって五月以来の再会を喜び合いました。

孫家はどこにあるのか。山内は「ハルビンの郊外で徒歩で三時間くらいかな」と語っているが、現代の中国地図の黒龍江省（旧浜江省はこの一部）で孫家という地名を探すのは難しい。昭夫たちはこの孫家で、ソ連軍の侵攻が開始した直後まで滞在するのです。

飛行機工場で従事した作業はキー8・4とよぶ戦闘機の組み立てでした。あまり危険な作業ではなかったが、それでも山内はジュラルミンの削り破片が目にささり、ハルビンの病院で入院加療したという。

工場に付属する宿舎の寝室は二段ベッドでした。昭夫と山内はベッドの場所が一緒で、昭夫が上段、山内が下段だったから就寝前はよくおしゃべりをしました。

八月六日にB29が広島に新型爆弾（原爆）を投下したという情報が伝わると、その話題で宿舎内が騒然となりました。山内が昭夫に「日本ももうダメだな」とつぶやくと、昭夫が「こんな時こそ勝つ方法を考えるべきだ」とムキになって反論したと、山内が述懐しています。

（毎週木曜日掲載）

石の上を歩く蚯蚓

蚯蚓が歩いている
固い石の上を歩いている
陽に刺されては横転しながら
あてもなしに歩いている

蚯蚓を見詰めていると
私こそ蚯蚓だったような気がする
あるいは蚯蚓の上を吹いていた
風だったような気がする

陽に刺され続ける蚯蚓は
刺された末に死ぬだろう
この世界の始めからの
しみだったように転がるだろう
陽を透さなかった石だけが
何事もないように残るだろう

だがそれからも私は
見詰めてやまない気がする
言い知れない長い時間のなかを
言い知れない風の恐怖のように
吹いてやまない気がする

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ㊷

小泉とし夫

■ソ連軍の侵攻

孫家で飛行機組み立て作業をしていた昭夫たち挺身隊は、ソ連政府が八月八日に対日宣戦布告を駐ソ佐藤大使に手渡されていたことを知らなかった。それはモスクワの午後五時すぎ、日本時間で夜十一時すぎのことでした。

この日は日米英宣戦布告の「大詔奉載日」で国境前線部隊の将兵は終日休養が与えられ夜にはささやかな祝宴も開かれていたことが『ソ連が満洲に侵攻した日』（半藤一利著）にみられる。

その夜は稲妻が走り豪雨が降り一寸先も見えない闇夜だったという。

八月九日の零時過ぎにソ連軍はいっせいに国境を越え、東部は東安方面、北部は黒河方面、北西部は満洲里方面から侵攻を開始しました。

たちまち国境の町々はなぎはらわれ、「国境警備隊員二十人と参事官金尾猛以下百人戦死、婦女子約百五十人自決せり」と満洲里から関東軍司令部に情報が入ってきたが、綏紛河でも日本人居留民が集団自決をしていました。

関東軍総司令部がソ連軍の全面攻撃を把握したのは夜が開けてからで、午前六時になって参謀長がやっと作戦命令を発令し、朝のラジオは「今朝、ソ連は日ソ中立条約を一方的に蹂躙（じゅうりん）し、不法にも全国境から侵入を開始しました。しかし、われに関東軍の精鋭百万あり、全軍の士気はきわめて旺盛、目下前線で激戦を展開、ソ連軍を撃退中であります…」と繰り返し放送しました。

孫家にはこのラジオ放送が届かなかったのか、九日の夜はひどく暑かったので昭夫たちは工場の原っぱで酒を飲んで涼んでいた。すると、ハルビン方向の空に五、六機の飛行機が旋回していて、パッと照明弾を落したのを目撃しました。その瞬間、あれはソ連機だと気づきました。

その翌日、ソ連軍の侵攻を知り大騒ぎになったのです。（毎週木曜日掲載）

つながれた象

立っているよりほかはないから
細い目で立っているのだ

見るよりほかはないから
隣りの象をさぐるのだ

空がかわけば鼻をゆさぶり
空がぬれれば鼻をゆさぶり
それが
生きることなのだと

吠えるよりほかはないから
遠く遠く吠えるのだ
そして
眠るよりほかはないから
死んだように眠るのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人 村上昭夫の肖像 ㊸

小泉とし夫

■挺身隊の解散

ソ連軍侵攻の翌日から飛行機の組み立ては中止となり、工場長の指示で兵器づくりが始まった。兵器といっても機材のジュラルミンで竹槍（銃剣）を作ることで、これでソ連兵と刺し違えでもしようとする原始的な兵器でした。

五日ほどして、軍から飛行機工場閉鎖の指令があったらしく兵隊たちは書類などの焼却をはじめ、官吏挺身隊も解散され、各自はただちに任地に戻れと工場長から指示され「私たちは十三日頃工場を引き払った。兵隊たちは残留していたようだった」と座談会で古舘君が語っている。

また「ハルビンは孫家からそう遠くないので私らより早く帰任したはずだ」と昭夫の消息について山内君が述べています。

この座談会記録によって、昭夫が山内、古舘両君らと「八月十三日頃」まで孫家に滞在したということは、その後の足どりをたどるうえに重要な意味をもつものです。

孫家から「徒歩で三時間くらい」というハルビンの公署に帰任してみると、十二日にはハルビン市在郷軍人会はハルビン防衛司令部の召集で郊外一帯に戦車壕掘りをやらされ、佳木斯やチチハルから侵入するソ連軍の進撃に備えていました。

また十三日には満洲軍の一部が伝家甸（満人居住区）で反乱したといううわさも流れ、役所内は混乱をきわめ、機能はほとんど麻痺状態に陥っていて、昭夫が目にしたのは日ごろ満系や鮮系の職員を使用人のように見下していた日系幹部たちのあわてふためく姿でした。

昭夫は終戦までの二日間、ただ鮮系の上司と重要書類などの焼却で過ごしたとみられます。

浜江省など地方の役所を直撃し驚愕させたのは、八月十二日に関東総司令部と皇帝および満洲国政府、中央官庁が首都新京より朝鮮国境に近い通化の山岳地帯に移転したといううわさでした。

灰色のねずみ

宇宙は灰色のねずみだ
または灰色のねずみの
つぶらな灰色の目だ

灰色のねずみを生んだのは
黒いかぶと虫
その時かぶと虫は
紙魚の薄明のへりを歩いていたのだ

宇宙が灰色のねずみだということを
なぜまっすぐに言えないのか
ねずみを生んだのは
黒いかぶと虫だということに
なぜちゅうちょするのか

その時かぶと虫が
紙魚の薄明のへりを歩いていたということに
なぜ目をそらそうとするのか

すべていきものといういきものは
こういうものなのだ
すべていのちといういのちは
こうあるものなのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人 村上昭夫の肖像 ㊹

小泉とし夫

■防衛線の三角地帯

首都新京の都市機能を、奉天(現瀋陽)から東方約百三十キロもある通化市に移転させたのは大本営の対ソ作戦計画によるものだった。新京を頂点に、大連と図們(トモン)をむすぶ偏平三角形の山岳地帯に防衛線を構築するもので、この三角地帯の底辺のほぼ中点の位置に通化があったのです。

しかし、山岳地帯には通信設備もロクになく、国境に近い開拓地の日本人の救出や都市居留邦人の安全確保など、地方官吏に適切な指示をするには問題があるので、中央官庁の幹部たちには移転反対の声もあったが、「総司令部の決済に反対するのか」と一喝されたという。

この三角地帯は全満洲の四分の一にあたるもので、ここに篭(ろう)城し持久戦にもちこみソ連軍をくぎづけにするという戦略は、本土決戦に対応して策定されたものでしたが、これによって満洲国の四分の三が放棄され、満蒙開拓者や一般居留民の犠牲につながり、残留孤児悲劇の原因ともなりました。

ハルビンや新京からの避難輸送は十一日ごろより始まり、ハルビン市防衛司令官は在留邦人に避難通告を行ったが、なんら具体方針もなく混乱を招きました。

新京では関東軍高官が避難輸送の順位を「民・官・軍の家族」と決めながら、いざ第一陣の列車に乗車したのをみると軍関係の家族だけだった。その日正午までに新京駅から出発した十八本の避難列車に三万八千人が乗車したが、軍関係家族と大使館など官吏の家族、満鉄関係家族がほとんどで一般人は二百三十人だけだったと資料にみられる。

八月十五日、昭夫は役所のラジオで終戦を告げる玉音を落涙しながら耳に深くきざみました。もはや満洲国は崩壊し、勤務する浜江省公署も解体され、敗戦国難民として生きていくべき運命をきびしく自覚したのです。(毎週木曜日掲載)

干された泥鰌

干された泥鰌は宇宙の尾根だ
高潔な思惟の数々が
干乾しになって連なっている

泥鰌を吹いていた風は
星の粒々だ
風が濃く吹き渡った時
天の向うが濃くみえたのはそのためだ

愛だという思念が
昔物語りのように遠くなり
失われたべとべとの粘液が
ものうげに
何処かで語られている
星はその時音もなく泣いているのだ

(詩集「動物哀歌」より)

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

⑮

小泉とし夫

■暴民による襲撃

十五日の正午を境にしてハルビン市は一変した。日本が無条件降伏し、関東軍による満洲支配が終わり、市内のいたるところ青天白日旗が掲げられ、大勢の満人や朝鮮人が街頭に飛び出し「万歳、万歳」と歓呼し、日本人を見かけると罵(ば)声をあびせました。

市内の治安は極度に悪化し、日系会社・事業所や居宅を襲撃、掠奪する暴民が横行し、彼らは積年の恨みを果たすかのように執ように荒らし回りました。

通化に移動したのもつかの間、八月十七日に満洲国は「解散」し、政治・行政機能が完全に消滅した。関東軍秦参謀長と宮川ハルビン総領事がハルビン駐在ソ連総領事に関東軍の全面的な停戦命令（全面降伏）を伝達し、居留民の生命と財産保護を要請したが、暴民の掠奪はあとをたたなかったのです。

浜江省公署が閉鎖され、役所から放り出され丸裸になった昭夫は、略奪を被っていたが生活はできる馬家溝の浜江寮に引き続き滞在していました。しかし各地から避難家族が続々とハルビンに流れ込んでくるので、避難民のために学校、劇場、デパート、ホテル、倉庫、官舎、満鉄社宅など大きな建物を収容所にあてたが、それでも足りないので浜江寮にも避難家族が収用されました。

昭夫はハルビン近郊の開拓地から逃れてきた家族から、悲惨な集団自決の話を聞きました。

避難命令を受け十三日に集合場所に行くと、すでに兵隊も警察官も日系官吏も松花江を船でハルビンに向かっていた。やむなく徒歩でハルビンに移動していくと、途中で数百人の武装した満人にとりかこまれ銃撃されたので、自決の道をえらび約四百人がホラン河に身を投じたが、不幸にしてわたしたち六十人が生き残ったと、泣きながら述懐しました。

昭夫は独身の寮友と避難民に部屋を譲り、ハルビン領事館の空き部屋に移転したものとみられます。

蟻とキリギリス

馬鹿なやつだ
蟻はさも軽蔑したように言った
三日うたって冷たくなる
しかもなんのたくわえがあるというのだ
まったく秋は
キリギリスのうたのようにはかない

馬鹿な奴だ
とにかく蟻は言い足りないようにして言った
自分の穴を掘ることさえ知らないで
ぜんたいなんのいのちだというのだ
まったく冬は
キリギリスの屍のように冷めたい
蟻は存分食べてめっきり太り
ずんと触角をのばして言った
俺などはまあ
昆虫共の霊長だものな
蟻は限られた穴のなかいっぱいに
満足して眠り始めた

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

46

小泉とし夫

■拳銃隠匿のぬれぎぬ

ソ連軍が八月二十日にはハルビンに進駐して市内埠頭区（ブリスタン）で入場式を挙行し、ハルビン駐在日本軍の武装解除が完了しました。昭夫が友人と二人で浜江寮の宿舎から日本領事館に一時移住したのは、ちょうどそのころのこととみられます。

領事館はハルビン駅前通り（車站街）と長官公署通りとが交差する角に、道を挟んでヤマトホテルと並んでいました。ヤマトホテルの隣に昭夫が勤務する浜江省公署が位置していたから、昭夫は領事館員とまんざら知らぬ仲でなかったのです。

ソ連参戦後、領事館の職員たちは家族ともども家財を積んで内地に向け南下したらしく館内は空き家同然でした。昭夫らは総領事に許可されて二階のベッドのある寝室を仮の宿舎としました。

数日したころ、自動小銃を抱えたソ連兵たちが、ドヤドヤと領事館に侵入してきて家捜しを始めたのです。やがて階段をやかましく踏んで数人のソ連兵がきて二階にひそむ昭夫らを発見しました。

彼らはマンドリンとよばれた自動小銃を向けロシヤ語でどなった。手を上げ立ちすくむ昭夫らを尻目に、書類や衣装ロッカーなど部屋中をひっかきまわし、ベッドマットをめくり、ベッドの下にもぐって何かを探しているのです。

のっぽの兵士が天井裏を探索して「あったゾ」というような声をあげました。発見した布包から取り出したのをみると一丁の拳銃だったのです。

昭夫らが拳銃隠匿容疑で連行されて行った先は、キタイスカヤにあったハルビン市公署で、進駐後に接収されソ連進駐軍公安局となっていました。

地下の取調室で通訳をまじえ厳しく尋問されたが、まったく身に覚えのないことなので昭夫らは領事館に移住した経緯を詳しく述べ、極力容疑の否定に努めました。

しかし天井裏に拳銃を隠匿した者が現れないかぎり容疑を晴らすことはできなかったのです。

象の墓場

象の墓場が
私をひきつけるのはなぜだろう
其処にある言い知れぬ寂寥が
私を呼ぶのではない

あの巨大な象の姿が
恐ろしいほどにさびしく見えるのはなぜだろう
其処にある墓場に向って
歩いているからではない

幾百の白い象牙の散らばりもさびしくはない
のびあがる鼻も皺寄った固い皮膚も
きれ長い眼も薄い耳も
草原に響くふとい咆哮も

さびしいものはなにひとつないのだ

それなのに
あの伝え聞いただけの象の墓場が
私をひきつけるのはなぜだろう
象が巨大であればあるほど
言いようもなくさびしいのはなぜだろう

それは恐らく
象の墓場から抜ける風の洞窟があって
象は其処から
皺寄った皮膚を捨て
鼻を捨て耳を捨て目を捨てて
それからは誰も説くことのできない世界へ
当然のように歩いて行くからだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

㊼

小泉とし夫

■鉄の足枷（あしかせ）

昭夫らは容疑のまま郊外の監獄に拘引されていきました。鉄の門をくぐりぬけると数人の中国人がハンマーをもって待ち構えていました。

ハンマーは両足に鉄の鎖の足枷（あしかせ）をする道具でした。足首に巻く鉄輪の穴に太いビョウをさしこみ、抜けないようにビョウの頭をハンマーで叩きつぶすのです。

もともとこの監獄は中国人の犯罪者を収容していたもので、爪文字で「日本警察鬼」と彫られていました。

八月十五日以後、中国人囚人は解放され、今度は日本人の脚枷をはめる雑役夫や獄卒になっていたのです。

十畳くらいの獄内には先客が十四、五名いて、あぐらをかき、おし黙っていました。その人たちは憲兵や警察官、省・県・市の管理者とみられ、昭夫よりはるかに年配の人でした。

獄内は厳重な監視のもとで消灯になるまでは横になることも仲間同士の話も許されなかった。食事は丸い椀（わん）一杯の蒸し玉蜀黍（たまねぎ）と、菜っ葉を浮かべた塩辛い汁で、バケツから檻（おり）ごしに樋を流し椀にうけとらせました。便器はすぐ満杯になり、あふれた排せつ物の臭気と、シラミだらけの体臭がむんむんこもっていました。

牢友は九時ごろからひきだされ、夜中に取調室で罪状認否を受けました。両手を縛られ、バンドや棒でなぐられ、革靴で蹴飛ばされ、逆さ水を飲まされ、焼け鉄棒を押しつけられ、鼻血をだそうが気絶しようが何度でも繰り返され自白を強要しました。

とくに武器隠匿容疑の昭夫らに拷問がきびしく、いくら拳銃は自分のものではないと抗弁しても虚しく、体中が打撲で腫れ上ってゴロ寝もできないほどでした。

獄卒は「この監獄はお前ら日本人が建てたものだ。この制裁もお前らの仲間が教えたものだ」とあざわらい拷問（ごうもん）に手加減しなかったのです。

呼び出され戻ってこない牢友は銃殺されたものと獄内でささやかれ、やがて自分の番がくるのではないかと昭夫は深刻に悩みました。（毎週木曜日掲載）

実験される犬

飼われたと思っているのか
鎖につながれていながら
そう思って通る人に吠えるのか
口にいっぱい泡をふくんでいるところは
よほど狂犬に近いのだ
それはもう幾度か実験されたのち殺される
それでも飼犬のように吠えている
しかも一匹ばかりではない
およそ数十頭も吠えている
私はいま恋人に逢いに行くところだが
此処からはひきかえさなければならない
ひきかえさなければ私も死ぬ
口にいっぱい苦い泡をふくんでいる
実験される犬がいるのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像 ㊽

小泉とし夫

■朝鮮・満州系同僚の助命嘆願書

ある日の朝、昭夫は典獄に呼びつけられました。いよいよ銃殺されるのかと緊張し典獄について行くと、たしかにいつもの取調室ではなく川のほとりに面した広場へと向かったのです。

するとどこで情報を知ったのか浜江省公署で一緒だった朝鮮や満洲（中国）人たちが「ムラカミさんは良い人だ」「悪いことをする日本人ではない」「拳銃は別の人のものだ、処刑をしないでくれ」と口々に典獄に訴えました。しかし昭夫は手錠をかけられ目隠しもされてしまったのです。

昭夫は、役所の仲間たちの民族を超えた必死の助命嘆願に、胸を熱くしながらも覚悟をきめました。ちょうどそのとき「処刑を中止しろ」と叫びながらソ連兵が走りこんできました。

彼はソ連総司令部公安部長の処刑中止命令書を携えていました。処刑が中止となったのは、日本総領事がソ連総司令部（コメンダント）に拳銃の所持者は帰国していった事務官のものだと証言したからでした。

総領事を動かしたのは、元の役所の同僚であった朝鮮や満洲の仲間の助命嘆願書でした。

昭夫は日本人の課長から民族差別を強要されても無視して、朝鮮系・満州系職員と隔てなく仕事をしたことが評価され、窮地を救ってくれたことに深い感動をおぼえたのです。

そして五族共和と言いながら、日本人の優越感から異民族を使用人として蔑視する植民地政策が、今日の敗戦につながり、銃殺の悲劇をもたらしたものと思われたのでした。

拳銃隠匿容疑が晴れて釈放されたのは八月末近くでした。昭夫は総領事や役所の仲間たちにお礼をしたのち、ハルビンを離れて新京（現長春）に移動しようと駅に向かうと、そこでまた受難に遭遇するのです。

昭夫が伊藤博文公の胸像のある駅舎まで来たとき、駅前に銃剣を擬してたむろするソ連兵につかまって、そのまま郊外の香坊にある「日本人男性用収容所」（元開拓義勇隊訓練所）に送り込まれました。

（毎週木曜日掲載）

黒いこおろぎ

私らの苦しみは
黒いこおろぎの黒い足のつま先の
一万分の一にも値いしない

私らの考えていることは
黒いこおろぎの黒い足のつまさきの
一万分の一にも値いしない

私らの持っている不治の病いも
かさなる願いごとも
私らの死でさえも
あの秋を鳴く黒いこおろぎの
細い足のつま先の
一万分の一にも値いしない
世界はまだできあがらない
黒いこおろぎなのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像 ㊾

小泉とし夫

■動物哀歌序曲

昭夫は、他人のえん罪によって危うく銃殺されるところでした。処刑場への道をたどりながら何を考えていたのか。恐らく頭の中は真っ白だったと思われます。しかし、死の瀬戸際に直面して凝縮した記憶は、風化しきれないシコリを遺していて、満洲から引き揚げてきたのち、何度もその悪夢に襲われるのです。病床でぐっしょり寝汗をかきながら、無明（むみょう）の闇に目を開き、昭夫は詩を作りはじめ、やがて満洲体験にもとづいた「動物哀歌」の発想にたどりついたのです。その最初の作品が「序曲」（のちに「屠殺場にある道」と改題）でした。

一九五八年（昭和三十三年）十二月一日発行のLa第五号に、昭夫の詩が初めて掲載されました。「動物哀歌」の題名で七篇の作品（序曲・空を渡る野犬・化石した牛・坂を登る馬・豚・蛇・マンモスの背）が収録されています。

その冒頭作品が「序曲」という詩篇でした。この〈序曲〉というタイトルから連想されるのは、これら七篇の詩は交響曲「満洲受難楽」の中の七つの組曲という発想だったと思われます。

のちに六十一篇の詩を収めて詩集『動物哀歌』第一章が構成されますが、「動物哀歌」の題名のはじまりだった七篇の詩の冒頭にある「序曲」（「屠殺場にある道」）が、詩集『動物哀歌』の真の〈序曲〉だったのは言うまでもないことです。

この詩にオーバーラップされる風景は、ハルビン郊外の監獄の裏手の「処刑場にある道」にほかならない。そして屠殺される豚を扱う「豚」という作品は、獄中で一緒だった日本人の処刑場面をアレゴリー化したものと理解されます。ちょうど「序曲」と対をなす受難楽で、そのように読めば、あの日の昭夫の思いが切々と伝わってくるのです。

（毎週木曜日掲載）

序曲

人の子ひとり通らない
けれども通つて行つたものがある

それがなにのか分りはしない
ひとつの点のようにも遠く
ひとつの塵のようにも軽く
けれどもたしかに振返りながら
歩いて行つたものがある

例えば見詰めてくれていた誰かの眼が
あんなに冷めたくはない
まつ白な雲になつてはいないかと
冴えてくる虹のようなその道を
登って行つたものがある

あるいは落としてくれた誰かの涙が
若しかして
水晶の玉になどなつてはいないかと
とぼとぼとひとりのその道を
捜して行つたものがある

人の子ひとり通らない
けれどもたしかにその道を
通つて行つたものがある

（「La」第5号から）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ⑤⓪

小泉とし夫

■日本人の男狩り

ハルビンでは八月二十五、六日ごろよりソ連兵によって「日本人男狩り」が開始されていたのです。

「男狩り」とは二十歳から四十五歳までの日系男子の民間人を、難民収容所や家庭や街頭から有無をいわさず捕獲（逮捕）し、郊外の香坊にある元日本開拓義勇隊訓練所の「日本人男性用収容所」に送り込むという暴挙でした。

ソ連軍がこのような暴挙に出たのは、二十四日に出されたスターリンの極秘指令によるもので、「旧日本軍の軍事捕虜のうちから、極東・シベリアの気候条件で労働可能な捕虜を最低五十万人選抜せよ」との命令でした。

しかし軍人軍属がすでに南下したり脱走しているので、武装解除と同時に各地区の軍司令官がソ軍に通告した所属の兵数と実数の間には相当の開きがあったとみられる。そこで難民や一般在留邦人を捕虜にして生じた不足人員を補充するため「男狩り」をしたものらしい。

昭夫が「男狩り」に遭遇したのは九月初めでした。拳銃事件のえん罪から釈放されたのち、新京に移動しようとハルビン駅に来たとき、網を張るソ連兵に連行され、捕虜として香坊の日本人男性用収容所に送り込まれたのです。

収容所にはすでに六千人ほどの日本人男子が収用され、昭夫のような二十歳未満の青年も見受けられました。

二、三日するとすべての捕虜を集合させ、二千人ずつの大隊に編成させました。昭夫は第一大隊に組み込まれました。その日の夕方、小糠雨の降るなかを、第一大隊は出発を命じられ収容所の裏門から鉄路に沿って東北方面に向かいました。

昭夫は冷たい雨にぬれながら、肩を落として敗残兵のような徒歩行進を続けました。どこに連れて行かれるか不明だが、どうも牡丹江を目指しているというわさでした。

（毎週木曜日掲載）

捨て猫

あれがひろわれることがないから
世界はまだぶよぶよのかたまりだろう
およそあれがひろわれなかったことを
見たことがない

あれが誰にもひろわれなかったなら
世界は雨と風と吹雪のなかに
塩をかけられたなめくじのように溶けているはずだ

あれは捨てられたその時から
親も兄弟も
あれに加わる味方は誰ひとりいないのだ
親はあれのひろい主をかんじょうに入れて
また捨て子を生むのだ
夜中じゅう鳴きあかした
あれの鳴声が絶えたとき
もう何処をさがしても
あれの死がいさえ見つからない

（詩集「動物哀歌」より）